校長室だより～燦燦～ №６３８

差し入れ

2022.10.17

この前、ある校長先生と、「差し入れ」の話になった。部活動での話である。差し入れと聞いて懐かしい感じがした。今でも、練習試合や遠征、合宿などでは差し入れは行われているだろう。

差し入れと聞いて、真っ先にある記憶が蘇った。まだソフトテニス部の顧問をしているときだった。森合庭球場での夏の大会だった。この頃には、大会での差し入れは行わないようになっていた。ところが、ある保護者が差し入れを持ってきた。アイスである。今でも忘れない。ソーダ味の棒アイスである。ちゃんと人数分ある。

この保護者は、大会や練習試合、遠征などに一度も顔を見せたことがなかった。お子さんは３年生である。きっと、もう最後だからと、仕事の合間を縫ってアイスを買い、森合に来てくださったのである。そのお気持ちはすぐに理解できた。

だが、まだ試合中である。他の学校がたくさんいる中で、アイスを食べるわけにはいかない。かといって冷蔵庫もない。困った。とりあえず日陰に置くしかない。試合が終わった。すぐにアイスを配った。案の定、すっかり溶けていた。それでも、みんな食べてくれた。差し入れてくださった保護者のお子さんは、いたたまれなかっただろう。恥ずかしかったことだろう。

あの時の３年生たちが大人になり、会を催してくれた。呼ばれてのこのこと出かけて行った。昔話に花が咲いた。すると、あのソーダ味の棒アイスの話になった。生徒たちは、ちゃんと覚えていた。時が経ち、笑い話になっていたが、私は笑えなかった。生徒たちも、親となり、我が子が中学生になれば、あの棒アイスに込められた親の気持ちがわかるかもしれない。それでよい。

生徒というのは、顧問がおごってくれたことなどをよく覚えているものである。別の学校の教え子たちの会にも、のこのこ出かけて行ったことがある。ここでも昔話に花が咲く。すると、会津若松での強化練習会の帰りに喜多方でラーメンを食べた話になった。

会津若松で県レベルの強化練習会に呼ばれて車で出かけたことがあった。せっかくだからと、遠回りをして喜多方に向かった。喜多方といえばラーメンである。しょう油ラーメンが王道であろう。だが、あえて味噌ラーメンの店に入った。そこが実はおいしいことは以前から知っていた。

喜多方に来て味噌ラーメンとは普通は考えない。若い頃は、１軒目はしょう油ラーメンを食べ、２軒目はその店で味噌ラーメンを食べたりしていた。ラーメンのはしごである。何年も経っていたが、教え子たちは、あの味噌ラーメンがおいしかったと口々に言っていた。そういうものなのであろう。

他にも、遠くに練習試合に行くと、帰りには必ずコンビニに寄っていた。そして、アイスをおごっていた。近年では、娘のときにも、遠征帰りのアイスは続いた。娘とその同級生は、何度アイスを食べたかわからない。アイスを食べる度に力をつけていったと言っても言い過ぎではない。

部活動でのアイスは格別である。ましてやラーメンなど最高である。顧問や保護者としては、ちょっとしたことなのだが、中学生にとっては特別なのかもしれない。今でもソーダ味の棒アイスを目にすることがある。自分で買うことはないが、見ると特別な思いがこみ上げてくる。思い出のアイスである。